

月刊

いじろのとも

第十五卷

一月号

振り向いて後ろを見る

振り向いて

後ろを見るな

そこに未来はない

という詩があるらしい

私なら言いたい

振り向いて

後ろを見る

救いのない

自分の過去が見えてくる

子は親の鏡だから

文科省

子ども教育

せんとせば

先ずは親から

啓蒙すべし

そうするとき

はじめて

真の未来も見えてくる

人生を考え直して

みたい人は(一一一〇)

空海『即身成仏義』解説(二三)

(一六) 5 速疾に顕わる

此(かく)の如くの経等は、皆この速疾力不思議神通の三摩地の法を説く。もし人有つて法則を欠かずして昼夜に精進すれば、現身に五神通を獲得す。漸次に修練すれば、この身を捨てずして進んで仏位に入る。具(つぶさ)には経に説くが如し。

この義に依るが故に、「三密加持すれば速疾に顕わる」と曰う。

加持とは、如来の大悲と衆生の信心とを表わす。仏日の影、衆生の心水に現ずるを加と曰い、行者の心水、よく仏日を感じるを持と名づく。行者、もし能く、この理趣を観念すれば、三密相應するが故に、現身に速疾に本有(ほんぬ)の三身を顕現し証得す。故に速疾顕と名づく。常の即時即日の如く、即身の義もまか是(かく)の如し。

現代語訳を、頼富本宏著『日本の仏教2 空海』(筑摩書房刊)から、引用させて頂きます。

* * *

以上のような経典などは、いずれも、このすみやかな力、すなわち思慮を超えた超自然的能力を起こす瞑想の境地の教えを説いている。もしも、ある修行者が、儀軌に説かれた法則どおりに、誤たずに、昼夜に励み、努めたならば、この身のままで、五種類の超自然的能力(神通力)を獲得する。順序を踏んで修練するならば、この身体を捨てないで、進んで仏の位に入ることができる。詳しくは経典に説いているとおりである。

以上のような意義に基づいて、「ほとけとわれわれとの三種の行為形態(三密)が、不思議なはたらきによって応じあうとき、すみやかにさとりの世界が現れる」というのである。

この文章中の「応じあう」「加持」とは、如来の大悲と、(それに対応する)人びとの信心とを表している。あたかも、太陽の光のような仏の姿が、人びとの心の水(の表面)に現れるのを、加 といひ、真言密教の修行者の心の水が、よく仏の太陽を感じとることを 持 と呼ぶのである。

修行者が、もしよくこの真理を心に思いこらすならば、

三種の行為形態がいち応じるから、この身において、すみやかに本来そなえ持っている三種の仏身を顕現し、それを体得することができるのである。それゆえに、すみやかにさとりの世界が現れるというのである。日常、「即時」とか「即日」というように、「即身」という意味もまた同様である。

* * * * *

今回は、「二頌（じゆ）八句」の三番目である「三密加持すれば速疾に顕わる」の最後の部分で、総仕上げの感があります。

この句の中心を成します「三密加持」につきましましては、これまで既に、十三巻の四月号と六月号で、また十四巻の八月号で、解説してあります。ご覧いただければ幸いです。

この部分は、現代語訳をお読み頂ければ、もう大体ご理解が得られることだと思えますが、少しだけ説明が要りそうな言葉を解説しておきます。

まず、二度出てきます「神通（じんずう）」についてですが、中村元著『広説佛敎語大辞典』（東京書籍刊）のこの見出し語には、次のように書かれています。

じんずう【神通】 すぐれた智慧。一般の人間の能力

を超えた、自由自在の活動能力。不可思議で自在な威力。超自然的な不可思議の能力。超人的な能力。不可思議な超人的なはたらき。無礙自在な通力（以下略）。また、中村元他編著『岩波仏敎辞典第二版』（岩波書店刊）の見出し語「六神通」には次のようにあります。

六神通 六通ともいう。人知を超えた次の6種の自由自在な能力。神足通（じんそくつう）は以下の五つの神通に含まれないさまざまな超能力の総称。たとえば飛行・変身など。天眼通（てんげんつう）は衆生の転生の状態を知る能力。または、あらゆるものを見通す能力。天耳通（てんにつう）はあらゆる音声や言葉を聴く能力。他心通（たしんつう）は他人の考えていること、心の内を知る能力。宿命通（しゆくみょうつう）は過去世の生存の状態を思い出す能力。漏尽通（ろじんつう）は自己の煩惱が尽きたことを知る能力。なお神足通は神境通、宿命通は宿住通とも言います。ここに出て来ました「五神通」は、この六神通から最初の神足通を除いたものです。

次に、「三種の仏身」ですが、これは、法身と報身と応（変化）身のことです。既に、第十三巻五月号で詳しく紹介しました。ご参照下さい。

自作詩短歌等選

愛をむしばむ

民主主義

愛をむしばむ

ウイルスぞ

免疫欠いた

日本は脆し

民主主義は幻想

日本人よ

民主主義なら

なんでもうまく行く

という幻想に

早く気付け！

オンリー・ワンの時代

人もボーダーレス

聖者と凡夫

男と女

大人と子供

親と子

教師と生徒

すべての人間は

個人に還元される

オンリー・ワンの時代

隠れた文化超大国！？

失われた十年の

九十年代に日本は

大衆文化の世界で

隠れた超大国に

なつたという

もてはやされる

アニメ

ポケモン

キティちゃん

日本食

ゲーム機器

世界で活躍する

デザイナー

建築家

音楽家

スポーツ選手

でも

あふれるような

メディアがありながら

メッセーじがない

と言われている

なぜなのかなあ！？

いったい

メッセーじって何？

哀れ凡聖逆謗

自らの

かげをうつして

批判する

凡聖逆謗

哀れや哀れ

女・子供も自己肥大

女が結婚しない
子供を産まない
子どもが性と暴力に
踏み込む
社会から引きこもる

こうした変化は
彼ら「女・子ども」が
社会の中で
弱い存在であるが故に
生き延びるために
そうせざるを得ない
からなのだという
それはちがう

民主化こそ最高価値

男の自己肥大を
民主主義教育によって
「女・子ども」も
「享受」するようになっただけなのだ

アメリカは
世界を民主化する
と意気込んでいるが
自らの国の民主化が
まず必要だ
という人がいる

それは
民主化こそが
最高価値という錯覚だ

義務とは何か

日本の憲法が
規定する三大義務は
納税と教育と勤労
でも
教育と勤労は
義務であると同時に
権利でもある

そうすると
真の義務は納税のみ
本当の義務は
人との関係が
直接
表現されるべし
それは
自分の情動を制して
人を愛する義務

わいせつ目的

キリスト教で言えば
神の義・人の義
儒教で言えば
仁
仏教で言えば
慈悲喜捨・利他心

若者による
わいせつ目的での
女児連れ去り事件が
多発している
規範意識が希薄化し
欲望達成のための
他者の手段化が
ますます進行する

自作随筆選

現代人の自閉化傾向

先月号では「自己の絶対化」と題する随筆を載せました。今月号は、これと強い関連がある「現代人の自閉化傾向」について述べてみたいと思います。

実は、先月号の「自己絶対化」の中で次のように書きました。「民主主義の進行によって、客観的な行動基準（つまり信仰や規範、英語で言いますとaxiom）を喪失しますと、人々の判断は、自己に閉じて行きます」と。

今月号では、現代人には、「判断」に限らず、精神全体が「自己に閉じて行く傾向」があることを指摘しておきたいと思うのです。

そう思ったきっかけですが、一月十一日（日）と十二日（月）に、NHK（第一放送）ラジオ深夜便の四時台に放送されました「こころの時代」で、神奈川県山北町で「くだけけ生活舎」を主宰されています和田重良氏が体験などを交えて、この生活舎のことを、いろいろ話されたのを聞いたことにあります。

私は、これまでも、どこかで書いたことがあると思うのですが、現代人がだんだんと自閉的になり、なにがしか統合失調症（かつての精神分裂病）の兆候を帯びているように考えて来たのです。

その兆候と言いますのは、私の言葉でいいますと「他己」が、弱体化し、枯渇した結果として現れるものなのです。脇道にそれますが、「論文」にも書きましたように、他己が弱体化しますと、精神病で言いますと「統合失調症」になりますし、また「自己」が弱体化しますと「うつ病」になって行きます。つまり、二大精神病が、自己と他己の機能不全で説明できるということなのです。

さて、「くだけけ生活舎」と和田重良氏のことですが、「くだけけ」とは、私も始めて聞いたのですが、「にわとり」の古語だそうです。インターネットでこちらのホームページを見ますと

「エサを欲しがるとヒヨコに親鶏が心をくたく、心をかける」とありました。

ここの「くだけけ生活舎」で、和田氏は不登校などの問題をもつ子どもたちと共に、農業や林業を中心として共同生活を送られているようです。詳しくは、インターネットのホームページに載っています。

ラジオ番組では、この方に金光寿郎氏がインタビューする形で進められていました。

そのお話の中で、預かっている子たちに共通する行動的・心理的特徴として、次の点を揚げておられました。

分け合うことができない。

共同作業しても、呼吸が合わない。

自分勝手なことをする。

言われた通りにすることができない。

自己表現ができない。

こころを開くように言われても何のことか理解できない。

そして、こうした特徴をもつようになった原因として、皆に共通して「幼児期に満たされた体験がない」からだと言われていました。「情」・「緒」的にも「知」的にもです。これを聞いていて、わたしは、即座にこれらの特徴は子どもたちに「他己」が育っていないからだだと直観しました。

少し説明しますと、例えば、分け合うことができない、と言いますのは、他者と「情動の共有」をした経験が少なかつたから、そうなっていると思うのです。

話の中では、具体的な例として、子どもたちの大好きな肉を大きな皿に盛って出しますと、一斉に奪い合っ

食べるそうです。それは、ニワトリが餌に群がってわれ先に食べるさま、さながらだと言われていました。

情動の共有とは、喜びや悲しみを他者と共に体験することです。普通の言葉でいいますと、共感とか同情とか言ってもいいと思います。互いの情動・こころを分かち合うことです。私は、そのこころの働きを「感情」と言っています。

彼らが、（例えば肉のような好きな食べ物を）分かち合うことができないということは、結局は、親や養育者との情動の共有ができてこなかつたために、この感情が育っていないことを示すものなのです。

感情という用語は、私の理論の根幹の一つをなすものなのですが、それは「人の心を感じるこころ」で、人間の人間たるゆえんをなすものです。人間性そのものと言ってもいいと思います。人間が、動物のニワトリを超えて人間なのは、人間にだけ、この感情の働きが備わっているからなのです。

現在不登校などの問題をもつ子たちが、こうした情動の共有体験を少なくしか持たなくなつて来ていることそのことが、現代人の自閉化傾向を示すものですし、またその再生産を促進する基になつてきているのだと思うのです。

私は、かつて自閉症児の行動的・心理的研究を行いました。その結果、その基本障害は上述しました情動の共有ができないことに現れた「人の心を感じるころ」の障害であることを明らかにすることができました。

そして、それは、自閉症児が自ら病んで私たち現代人に、「今みんながそうなっているぞ」と警告を発してくれているのだと受け取りました。現代人が人間性を喪失して来ていることを警告するために仏さまが、つかわされた使者であるように思われたのです。

まさに、いま多くの子どもたち、否、多くの大人たちが、人の心を感じるころを失って、自閉化傾向を強めて来ているのだと思うのです。

自閉症は、先天的障害とされていますが、後天的に自閉化することは、統合失調症との近縁障害を思わせます。わたしは、それを「自閉性人格障害」とでも名づけたいと思うのです。なお、余談ですが、自閉症という言葉は差別的な色合いを帯びているので、名前を変えようという運動があるようですが、なかなかいい名前が見つからないようです。ここでは、一応、自閉ということばを使っていますが、もし、変えたほうがよいということでしたら、私は、「幼児性他己不全症候群」とでもしたらいいかかと思っています。そうしますと、「自閉性人格障

害」は「他己不全性人格障害」ということになります。ところで、この障害の特徴ですが、和田氏が挙げられました、不登校児たちの行動的・心理的諸特徴がすべて当てはまります。

人間が自己に閉じてきますと、「分け合うことができなない」だけではありません。基本的にコミュニケーション障害がありますから、他者の意図や気持ちなどを理解しようとしませんし、できもしませんので「共同作業しても、呼吸が合わない」ということになり、自分の思い込みだけで「自分勝手なことをする」ようになり、「言われた通りにすることができない」ということになってしまふのです。

しかし、彼らが自発的に「言われなくても」仕事や作業などの行動を起こすことができるかといいますと、それはできません。彼らはいわゆる「指示待ち人間」とでも言える人間なのです。

もっと説明がいるかも知れませんが、感情の障害を基本とした「他己」の機能に不全があると、行動が刹那的になり、自らが自らの行動の「目的」をもち、その目的を達成するために「計画」をたて、その計画通りに「実行」し、その結果を「評価」というような自主的・主体的行動が出来なくなるのです。多くの行動が刹

那的になり、時間的な前後関係がどこかに飛んでしまうのです。そして、その場の状況を的確に判断することができず、刹那的になるのです。

以上のような、行動的に目立つ特徴の他に、もっと彼らの心の状態を的確に示す重要な特徴があります。それは、彼らが「自己表現ができない」ということです。

和田氏の言葉の中に「情が満たされていない」というのがありましたが、それは、前述のように、子どもたちが情動の共有体験をもつことができずに育ったことを示しています。そうしますと、他己の根幹をなす感情が育ちません。少し飛躍するかも知れませんが、感情が育ちませんと、人を信じたり、愛したりすることができなくなるのです。逆に、常に他者が自分に迫ってくるのです。ですから、内心は、いつもびくびくしていますし、まして、「こころを開く」ことなど、できるわけがないのです。そうしろと言われても、それが何を意味するかさえ理解できないのです。

それほど心が自己に閉じているのです。「人を愛しなさい」とか、「人を信じなさい」とか言われても、それが、実際にどういうことなのか全く理解できないのです。

人に愛されたい、人に可愛がられたい、人に認められたい、という極めて強い欲求をもっているのに、自分は

そうはできないのです。実は、そういう欲求を強くもてばもつほど、他者にはそうできないものなのです。

また、和田氏の言葉の中に「知的にも満たされていない」というのがありましたが、その例として、そうした子どもたちは、自然の中で起こる現象がなぜそうなるのかといった「知的好奇心を満足させていない」と言われていました。

そうなりますと、知的には色々な知識をもっているのに、それが現実はどう役に立つかが理解できなくなってくるのです。

つまり、知識が現実の行動から遊離してしまうのです。知っていても、それを現実生活で使うことができません。前述しましたように、信じるとは何か、愛するとは何かを言葉としては、自分の知的能力に応じて、説明したり、定義したりすることは出来るのですが、しかし、現実に行うことはできないのです。あたかも自閉症児の示すプリンター・アビリティの如くです。

それは、実際の仕事でも言えます。ルーチン化された仕事なら、そこそこ、こなすことが出来るのですが、何か少しでも判断を伴う仕事や作業に出会いますと、できないのです。前にも述べました「情を満たす体験不足」という理由以外にも、ここで述べましたような「知的好

奇心を満たす体験不足」のために、「自分勝手なことをしたり」、「言われた通りにすることができなかったり」するのです。それは、実際問題として、どうしてもいいか分からないから、自分の思い込みだけで行動することになる、ということでもあるのです。

こうした子どもたちの精神状態について、私の「人間精神の心理学モデル」でまとめておきたいと思います。

彼らは、学校教育や読書などで養ってきた 認知 言語機能（知識）は、ちゃんと働いているのですが、それが、 情動 感情機能と 感覚 運動機能から遊離しています。また、 自我 人格機能も、他己が枯渇していますので、「感情」機能と同様に「人格」機能が働きません。現代人の一つの典型を示すものだと思います。

少し補足しておきますが、こうなりますと、何事にも「目的」意識をもつことができず、精神に「一貫性」がなくなります。そして、精神全体の「統合」がとれなくなって来るのです。ということは、性格が極めて小児的で、幼稚になります。

彼らは、他者の期待や意図が理解できませんし、また、何事をも反省することすらできないのです。叱られても、ただ、にやにやしたり、へらへらしたりしているだけなのです。

それは、他己は自分を写す鏡でもありませんから、他己が萎縮しますと、自分を客観的に理解することができなくなる、ということなのです。なぜ、反省するといった何でもないことができないのか、とできる人には不思議に思えるのですが、できないのです。ただ、にやにやへらへらしているだけなのです。

ですから、いくら反省したように見えても、それを次に生かすことが難しいのです。生かすことができるのであれば、こころの伴わないただの「ソーシャル・スキル」で対応するだけなのです。

また、他己が育っていませんと、責任感を抱くことができず、よく失敗したり、間違ったことをするので、それに対処したり、謝ったりすることができません。たとえ失敗を指摘されても、「ごめん」とか「すいません」という言葉が即座に、かつ素直に出てこないのです。また、「ありがとう」という言葉についてもそうなのです。

では、こうした人格障害をどう直して行けばいいのか。なかなか難しく、手軽な方法はありません。これまで何度も述べてきました子育ての方法を実践する以外にはないのです。それは、愛情（情動の共有）の基礎の上に自由と 統制を的確に与えて行くことです。

釈尊のごとば（一二九）

（三八六）静かに思い、塵垢（ちりけがれ）なく、おちついて、為すべきことをなしとげ、煩惱を去り、最高の目的を達した人、かれをわれはバラモンと呼ぶ。

釈尊がバラモンと呼ばれるのは、どんな人なのか、について書かれています。

それは、まず第一に、静かに思う人、つまり静かに瞑想する人、たとえばヨーガを毎日実践する人です。

そして、次に、塵垢が無い人、つまり、身を清潔に保つ人、それは、風呂に入って衛生的にきれいにするというより、十善戒のような戒律を護って、身の潔癖を保つ人です。

そして、おちついて、為すべきことを為す人、たとえば六波羅蜜である 布施、持戒（前出）、忍辱（んにく）、精進、禅定、智慧の徳目を為す人です。

詩にも書きましたし、何度か引用もしたと思いますが、私たちが多くの人は、してはならないことをし、しなければならぬことをしませぬし、言うてはならないこ

とを言い、言わなければならぬことを言いません。また 思つてはならないことを思い、思わなければならぬことを思わないものです。しかも、大多数は、そうであることを気付かずになりすます。現代人は自己に閉じていますから、ますますそうなる傾向が強いのです。なぜなら、私が四聖とする釈尊、ソクラテス、老子、イエス・キリストの教えも自分と同等ぐらいにしか考えていないからです。後になりましたが、為すべきこととは、そうした人たちの教えなのです。

次の、「煩惱を去り、最高の目的を達した人」ですが、これは、意識して出来ることではありません。始めに出てきました、静かにヨーガをしたり、戒律を守ったり、為すべきことを為したりすることは、たとえ困難でも本人の強い意志と努力によつて行うことは、可能かもしれませんが、でも、この最後の、煩惱を去ることや最高の目的を達することは、意識してできることではないのです。ヨーガにひたすら励み、戒律を犯さず、為すべきことを為したかどうか、毎日反省し、精進を重ねていくとき、はじめて達成されることなのです。

勿論、最高の目的とは、解脱すること、悟りを得ること、彼岸やニルヴァーナ（涅槃寂靜・平安）に達することです。日々、精進を重ねたいものです。

後記

- 一、十二月の終わり頃、雪がどっさり降りました。ある地方では、何十年ぶりの大雪だったようです。
- 二、明けましておめでとうございます。早々に年賀状を頂きました方に、この場を借りてお礼申し上げます。毎年のことですが、どなた様にもこちらからは年賀状を失礼いたしております。申し訳ありません。一家の写真があつたり、本誌の感想を書いてくださったり、楽しく読ませて頂きました。
- 三、大学で開いていますインターネット上のホームページへのアクセスが、このところ増えています。毎日十件ぐらいのペースでしょうか。ありがたいことです。時々、意見を求めて来られたり、感想があつたりします。『こころのとも』は全巻全号をホームページ上で公開できましたが、まだ、論文が残っています。三月の退職までには、全ての論文を公開できたらと努力しています。
- 四、現在は、朝日新聞と毎日新聞とサンケイ新聞の切り抜きをしていますが、どの新聞を見ても（中には的確に現状認識をしているものもありますが）今後の対策や問題解決策になりますと、残念ながら正しいものは一つもない、と言えるほどです。
- 五、「個」を主張する民主主義や宗教が世界を席卷して

います。この状態が続きますと、ますます、世界は不安定要因を増して行くことだと思えます。そうなのに、日本人は、実情に対する認識が甘いようです。外国人の方が、ずつと的確に見ているように思えます。

六、それは、仏教に対する認識もそうなっています。いま、仏教書ブームだそうですが、書店で手に取ってみますが、私の目からは、多くは、間違っています。ますます、仏教が廃れていくことだと思わずにはおれません。残念なことです。売れる本は、自分への執着をますます強めるように書かれたものばかりです。仏教は自己への執着を捨てることを説いていると思うのですが。

月刊 こころのとも 第十五巻 一月号 (通巻 一六九号)	平成十六年一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よしよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	